小児尿路感染症の研究

千葉大学医学部泌尿器科学教室　片山　喬
千大泌尿　安田耕作
岩間汪美
千大中検　小林章男
千大小児　新美仁男

I. 女子小，中学生における無症候性細菌尿

千葉県夷隅郡および勝浦市の女子中学生を対象に4年間にわたり行われた無症候性細菌尿調査の結果を紹介した。検出率は 0.15～0.19% で，小学生で高率（0.15～0.25%）に検出された。有意義な細菌尿を有した30名中6名は治療を行ったにも拘らず1.5年ないし観察全期間にわたり細菌尿が検出された。その 70% に尿路X線造影で異常が認められ，発熱，失禁などの訴えがあった。他の8名は6ヵ月～1年間にわたり細菌尿が検出され，50%に尿路造影で異常が認められたが，訴えをもったものは少なかった。分離菌は1名の他はすべて大腸菌であり，半数のものは膿尿を有したが蛋白尿は全例で陰性であった。

小林章男ほか：日医新報 No. 2787, 19, 1977.

II. 千葉市学童における無症候性細菌尿

千葉市全学童を対象として第1次，第2次検査はウロトレース法，第3次検査は定量培養，菌の同定により細菌尿の検査を行い，77,950名中女子63名（0.16%），男子5名（0.013%）に有意義な細菌尿を認めた結果を紹介した。この68名のうちさらに連続して細菌尿を認めた6例に対し，IVP，膀胱鏡，voiding UCG などの泌尿器科的検査を行ったところ，うち1例に明らかなVURを，他の1例に膀胱の変形などの所見を見出した。

表 1

	外来患者数	小児患者			小児尿路感染症患者		
		男	女	計	男	女	計
昭50	3,383	334	123	457	38	24	62
52	2,555	327	138	465	20	37	57
52	2,378	264	72	336	26	27	53
計	8,316	925	333	1,258	84	88	172

III. 千葉大泌尿器科外来における小児尿路感染症について

千葉大泌尿器科外来における昭和 50～52 年の3年間における小児尿路感染症は表1に示す如く172例であった。

これを年令別にその分布をみてみると男女とも5～6才と13～14才の両者にピークが認められた。来院時主訴では排尿痛が最も多く，ついで頻尿，血尿，発熱，夜尿の順であり，診断名としては膀胱炎が最も多く，ついで腎盂腎炎，包皮炎，膣外陰炎，尿路結石，神経因性膀胱の順になっていた。又，検出された細菌の種類では大腸菌30例，腸炎桿菌5例，Klebsiella 4例，連鎖状球菌3例，変形菌2例，Candida 1例であった。また尿蛋白は（－）～（±）のもの109例，（＋）～（卌）のもの38例という結果であった。

小児尿路感染症の臨床的研究

神戸大学小児科　松尾　保　平海光夫
池内春樹　上原慎一郎

I. はじめに

小児尿路感染症は上気道感染症に次いで小児の発熱の原因疾患であり，多彩な臨床症状を呈する。一方，近年学校検尿の普及により不顕性または無症候性の細菌尿患児が発見されるようになり，このような児が将来腎実質

性疾患の発症や腎機能障害の招来の上に大きく影響することが報告されている。

そこで，われわれは過去2年間において教室で経験した原発性尿路感染症の頻度及び年令，再発をくりかえす難治例について若干の考察を加えて報告する。

II. 研究成績

1) 昭和51年度，52年度における尿路感染症の頻度

表1は過去2年間，教室において診断し，管理した原発性尿路感染症の頻度及び発見時年令についてまとめたものである。

入院症例は昭和51年度8例（3.2%），昭和52年度は7例（2.9%）で，2年間の平均は3.05%であった。入院症例の発見時年令分布は1才未満の症例が7例（47.0%）ともっとも多かった。外来の症例は昭和51年度74例（2.3%），52年度74例（2.2%）と平均2.25%であったが，発見時年令分布にはとくに各年令群間に差異がみられなかった。

上記，原発性尿路感染症163例中再発をくりかえし，難治例としては9症例で，性別としては男女比（2：7）で女児に多く，しかも，IVP検査において9例中7例（78.0%）に異常が認められ，そのうち4例にVURが認められた。免疫学的検討では血清IgAの低下が1例，自己抗体陽性所見を示すものが2例に認められた。

2) 尿路感染症の発症因子について

ⓐ 起炎菌：中間尿定量培養で10^5/ml以上の細菌尿を示す場合を起炎菌としてまとめれば大腸菌がもっとも多く（約73%），僅かにPseudomonas, Proteus, Serratia属が認められている。

ⓑ 尿路異常：IVP所見にて約1/3の症例に尿路異常，とくに遊走腎がもっとも多く見出され，再発例においては既述のように高率に認められている。

ⓒ 免疫グロブリン：IgG，IgM，IgAについて検討したところ，IgA濃度において低値を示す症例が多く，興味ある結果が得られた

表1 昭和51年度・52年度における尿路感染症の頻度及び年令

		昭和51年度		昭和52年度	
		外来	入院**	外来	入院**
総数		3,280	248	3,342	242
尿路感染症*		74 (2.3%)	8 (3.2%)	74 (2.2%)	7 (2.9%)
年令	～1		4	10	3
	1～2		0	14	1
	3～5		1	16	1
	5～10		2	17	0
	10～		1	17	2

* 原発性尿路感染症のみ
** 神戸大学一般病棟（未熟児病棟は除く）

3) 尿路感染症経過中に急性腎不全症状を呈した症例

過去2年間において尿路感染症をもって初発し，経過中に浮腫を伴い，BUNの上昇，血清Kの上昇，いわゆる急性腎不全症状を呈した2症例を経験した。1例はLasix, Manitolで軽快したが，他の1例は人工透析により軽快した。起炎菌としてはSerratia marcescens, Proteus rettiegeriなどの弱毒菌が検出された。

III. まとめ

1) 尿路感染症の頻度は入院約3%，外来約2%であった。
2) 再発をくりかえす難治例は女児に多く，IVP異常を示す率が高かった。
3) 原発性尿路感染症の症例において急性腎不全症状を併発する症例があるので注意を要する。

糸球体障害の腎内分布に関する研究

――急性及び慢性腎盂腎炎を中心に――

独協医科大学 飯高和成 五月女茂
石飛文雄 手塚司郎
木村一元

巣状糸球体病変を生検材料より診断する上で，腎皮質内における障害糸球体の分布様相を明確にする必要がある。巣状糸球体硬化症に際して，主として皮髄境界部皮質に障害糸球体が多く分布を示し[1]，病変の進行に伴い

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Ⅰ.はじめに

小児尿路感染症は上気道感染症に次いで小児の発熱の原因疾患であり,多彩な臨床症状を呈する。一方,近年学校検尿の普及により不顕性または無症候性の細菌尿患児が発見されるようになり,このような児が将来腎実質性疾患の発症や腎機能障害の招来の上に大きく影響することが報告されている。

そこで,われわれは過去 2 年間において教室で経験した原発性尿路感染症の頻度及び年令,再発をくりかえす難治例について若干の考察を加えて報告する。